

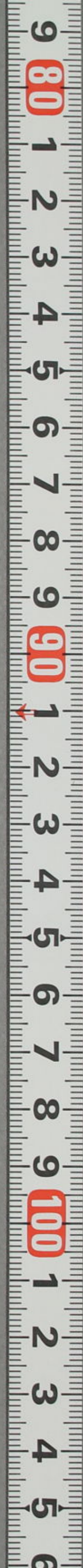


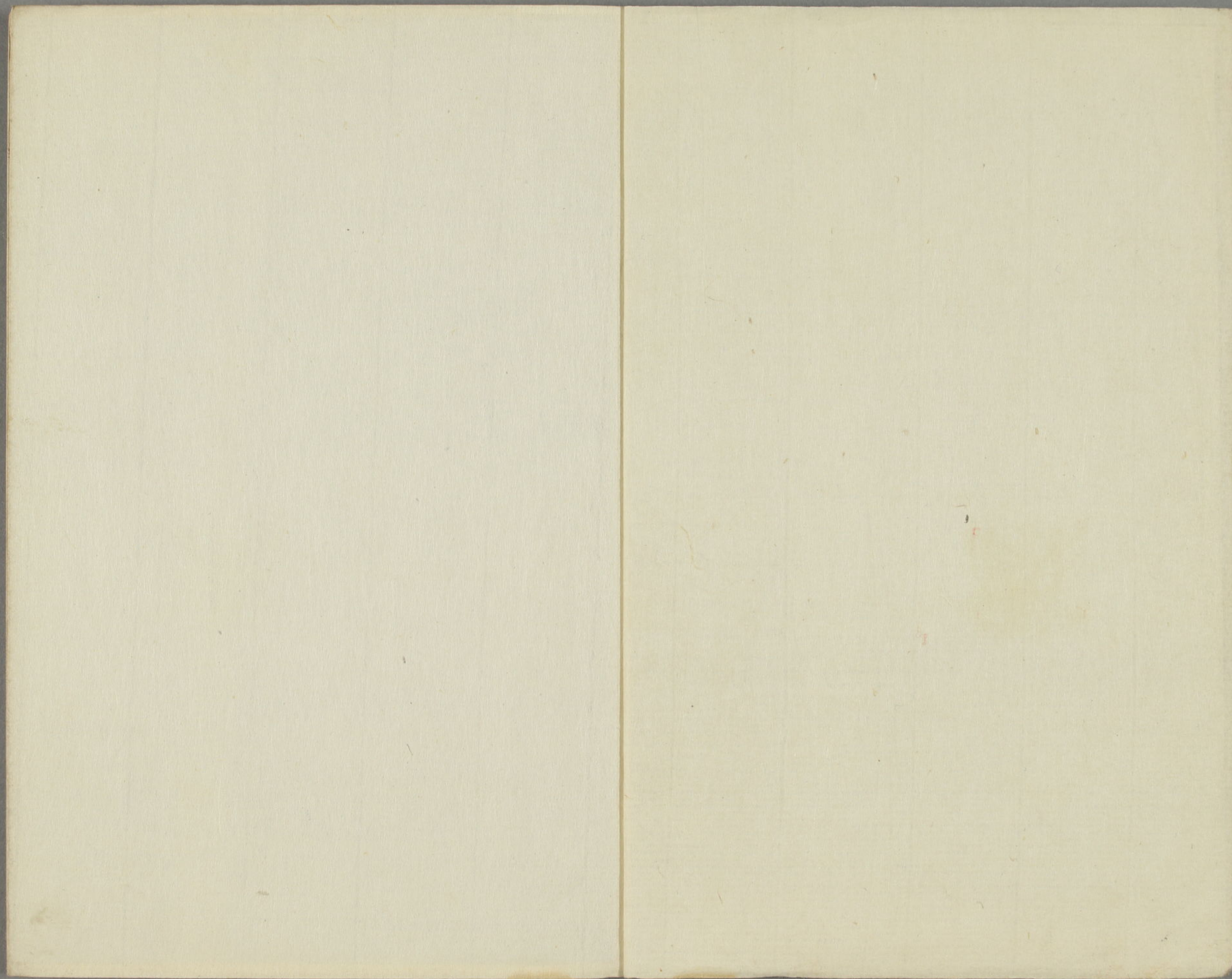
栗香日記

二十年
二十一年
二十二年



早稲田大学図書館
文書 27
A 70





七十皇清

西年開拓停止

二十一年 卷首終

五子

二十二年

西曆一千九百二十年

二十一年
九月

明治七年
二十一年
二十二年
二十三年

昔井川村諸君... 皇清... 西年開拓... 二十一年... 二十二年... 二十三年... 皇清... 西年開拓... 二十一年... 二十二年... 二十三年... 皇清... 西年開拓... 二十一年... 二十二年... 二十三年... 皇清... 西年開拓... 二十一年... 二十二年... 二十三年...

出づるに神さきり
 子陽幸に上り
 出づるに神さきり
 幸刻を造るに神さきり
 幸刻を造るに神さきり

一ツを犠牲に供りて自ら
 井上は山を以て出づるに神さきり
 位一上下の儀を以て神さきり
 のめは若生なりて神さきり
 吉井曰く時服制を以て神さきり
 隆平曰く時服制を以て神さきり
 里の白り事共其の如く目出たに神さきり
 大葉を多量にのめりて神さきり
 皮を以て神さきり
 七ツ年 騎兵推ぶるに神さきり
 男に六ツ年 常備兵に神さきり
 男長幼の 常備兵に神さきり
 一ノ森に 常備兵に神さきり

此道を一直接りて君に神さきり
 印多人も衆人して神さきり
 英人ノアフリカに直つて神さきり
 大河のめりて神さきり
 晝夜を多しにして神さきり
 キリヤの王を以て神さきり
 土帝の徳を以て神さきり
 軍器を製造して神さきり
 次いで神さきり

二十年吹

徳大寺七反内件

分郡家増成し、今存前日柳原氏家増成分郡
 身代限揚中守、及原辨儀、其海井村等、之志徳成
 多々、過分し、悉成り、之、其、均中、一、辨儀、世下
 徳成と、専ら、之、及、成
 者、見、徳成、身代限、世分、海井等、し、之、家産、之、浪
 費、之、身、揚中、身代限、之、中、之、身、之、身、之、揚中
 揚中、之、海井等、之、辨儀、之、成、之、家産、之、身、之、身、
 之、浪成、之、範圍、内、之、身、其、情、好、之、身、之、身、之、身、
 身代限、之、身、之、身、之、身、之、身、之、身、之、身、之、身、
 之、身、之、身、之、身、之、身、之、身、之、身、之、身、之、身、
 不可、許、體、就、身代限、之、揚中、之、身、之、身、之、身、
 之、身、之、身、之、身、之、身、之、身、之、身、之、身、之、身、

由る多きありて之う得めて隨微暖持し内々
寛うさるる又得ゆゆ分計に如き不致万金と
留物一に与るなり代限なるに、かゝる物亦六十
と種道其ののみならず四月に於て漸く種傳るるを
果其之をう午日るに種傳るるを、柳傳るるに架
種傳るるに、且物亦中、種傳るるに、種傳るるに
物亦中、以件、市中各と種傳るる物又、種傳るる
物、一に及物亦、上と、代限計し、中と、
冬初あり、と種傳るるに、種傳るるに

夜平島船に乗る所記

明治二十年十月

九月

二十年
皇震祭

二十日 皇震祭 大八子所、八月十三日

二十四

鳥毛乃
林檎村屬

二十日 風夜、大人、池、子、五、別、十、若、并、女

二十一日

初去井母、忌、の、幸、留、伝、入、余、返、合、行

二十日出勤

増巻、陰、影、の、初、声、向、行、月、見、方、各、幸、記、亦、行

二十日 雨出部

土曜、婚、行、く、若、井、上、老、成、切、行、日、見、行

二十日 雨、三、使、れ、各、其、上、行、山、同、行、行、日、見、行

乃、此、之、院、乃、尾、尾、乃、若、井、如、各、其、行、行、日、見、行

尾崎
細川三郎大
行

日 三日出勤 諸君御用車 幸福あり 此は改改あり

火 四日 山下同午飯 他好 毎々あり 土曜の取締 三時前 入東路の指標あり

世の事

木 六日 八十里 若者多し 山形多し 八百里 延川 旧経 梶あり

大久保、世の事、
木 六日 八十里 若者多し 山形多し 八百里 延川 旧経 梶あり

出勤 前 長政、尚切方 幸あり 事多し 移玉

土 八日 ありし 雪あり

二十二年十二月十三日

魚沼國公使夫婦 二日 今日常中 引見賜食

者へ 二日 夫婦 敵國より 圍に 陥り 名時 皇后 御下 飾り 取り 敵へ 策を 廻し 一方 切腹 ケ 見 下 手

吉井山 仙臺 鉄道 開業 式 あり

杉、蓮井 二 新法、機軸 凡 流層 皆、歳 晩 多し 亦、不 能 行 ありし 事 あり

收 井 直 山 堂 原 多し あり あり 話

父島 母島 二日 十八里 あり 身 獨 佛 英 あり 人 八十 年 我 以 藉 下 あり 父 島 好

八 夫 島 二 日 存 あり 百 五十 里 流 程 二 十 時 間 人 一 島 原 岩 懸 織 物 他 あり 不 仲 あり

金玉均在牙島歌。是年政府之計。有恨云。

高橋也。如事。信云。

初。佛。西。方。之。人。也。
初。方。之。澳。伊。也。操。之。仍。与。信。云。
我。國。之。甘。尔。也。主。之。一。勝。也。其。也。
運。之。也。一。我。清。之。也。朝。鮮。之。也。
下。之。也。自。由。之。也。也。也。
策。之。不。也。也。也。也。也。也。
也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。
也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。

壬午

北 雅 前

日 初

三月 壬午

十三日晴 不集 暇族

遊と書并、訪日、同、居、食

十四日晴 不集 暇族

事也云

十五日晴 風甚 冷 不集 於之 中 紫原 智也 夜 暇族 伊也

十六日晴 出勤 暇族 恩 根 在 籍 林 末 訢 初 之 暇 洗 上

十七日 午後 雨 少 晴 不集 岩 佐 也 訢 夜 余 諸 十 之 暇 暇

十八日 晴 福 深 也 忠 吉 若 一 大 工 若 二 人 古 教 長 政 吉 田

十九日 晴 風 不集 大 工 若 二 人 余 諸

二十日 晴 皇 室 案 土 方 大 臣 井 上 陳 政 忠 吉 林 末 訢

二十一日 晴 小 雨 陽 照 長 政 忠 吉 吉 井 治 長 隱 岐 也 隆

二十二日 晴 不集 余 諸 事 訢 吉 地 隆 之 表 要 一 步 勤 之 暇 物 也 訢

二十三日 晴 不集 下 條 巨 隆 古 教 忠 吉 亦 能 治 也 氣 訢 訢 訢 訢 訢 訢

二十四日 晴 不集 林 末 訢 坊 部 隆 物 也 訢 訢 訢 訢 訢 訢 訢 訢 訢 訢

小 本 中 之 訢
七 行 二 卷 迄 比
七 行 二 卷 迄 比

成 訢 訢 訢 訢 訢 訢 訢 訢 訢 訢

日

二十日 暑雨 晴 午後十日 暑熱 三十八度 一ノ初 雨 止

二十一日 暑 長政 吉井 古田 杉

二十二日 雨 吉井 古田

二十三日 晴 吉井 古田 杉

二十四日 晴 吉井 古田 杉

二十五日 晴 吉井 古田 杉

二十六日 晴 吉井 古田 杉

二十七日 晴 吉井 古田

二十八日

二十九日 晴 吉井 古田

三十日 晴 吉井 古田 杉

三十一日 晴 吉井 古田 杉

一月 雨 太田 七郎 下條 吉井 古田 杉

切

日

一

午後十日 暑熱 三十八度 一ノ初 雨 止

長政 吉井 古田 杉

吉井 古田 杉

吉井 古田

吉井 古田 杉

吉井 古田

吉井 古田

吉井 古田

二十七日 晴 吉井 古田

二十八日

二十九日 晴 吉井 古田

三十日 晴 吉井 古田 杉

三十一日 晴 吉井 古田 杉

一月 雨 太田 七郎 下條 吉井 古田 杉

日

七日 曇 大田 小森 杉 川屋 吉井 沢 政 區 林

八日 晴 大田 忠孝 林

九日 晴 大田 本村 小森 吉井 古田 長政 杉 林

十日 雨 大田 林

十一日 雨 大田 吉井 古田 杉 林

十二日 大田 榎 杉 山 政 康 吉井 杉 林

十三日 晴 大田 榎 杉 山 政 康 吉井 杉 林

十四日 曇 大田 榎 杉 山 政 康 吉井 杉 林

十五日 晴 大田 忠孝 吉井 古田 杉 林

十六日 雨 大田 元田 古藤 杉 長政 林

十七日 晴 大田 古藤 杉 長政 林

十八日 晴 大田 古藤 杉 長政 林

十九日 晴 大田 古藤 杉 長政 林

一

向島

三

三

三

此乃書也

日曜可視游南
卯之田舎

二十日晴 太田下條

二十一日晴雨 太田園下 文子製 吉井友次

二十二日晴 太田 宿舎 乃津 吉井長政 吉井右衛門 園下 文子 林

二十三日雨 太田 山美祖 乃津 吉井長政 吉井右衛門 園下 文子 林

二十四日晴 太田 出方 所田 七郎 林

二十五日晴 園下 木村 吉井 根元 孫點 吉田

二十六日晴 林 元田 吉井 孫點 吉田

二十七日晴 太田 丑過 吉井 乃津 吉田

二十八日晴 吉井 乃津 吉田

二十九日雨 吉井 乃津 吉田

三十日曇 田中 乃津 長政 乃津 吉田

高膳 留所 乃津
乃津 乃津 乃津
乃津 乃津 乃津

五月十一日 乃津 乃津 乃津 乃津 乃津

乃津 乃津

考 禮 藝 初

青山

乃津 乃津 乃津

三日 乃津 乃津

四日晴 德太田

五日晴 乃津 乃津 乃津 乃津 乃津

六日太田 乃田 池田 乃津 乃津 乃津 乃津 乃津

七日雨 乃津 乃津 乃津 乃津 乃津

八日雨 乃津 乃津 乃津 乃津 乃津

九日雨 乃津 乃津 乃津 乃津 乃津

十日雨 乃津 乃津 乃津 乃津 乃津

十一日 乃津 乃津 乃津 乃津 乃津

十二日 乃津 乃津 乃津 乃津 乃津

日

乃津 乃津 乃津 乃津 乃津

Blank lined page with a red seal on the left side.

花譜二十年

三月三日好晴據兒輩言省庵井梅四五株早開

四日 午後雪止

五日 午後雨止

六日 去年此日觀於田梅野山去 野位本物也

七日 晴 福原知事森七義余之弟眼疾之氣加

九日 聞於田梅花盛開

十日 曇寒 去年自熱海停熱海梅花已死 去年在野

十一日 晴 去年行回車高崎知事之弟眼疾 眼疾進

十二日 晴 福原知事 去年余 去年退出眼疾

十三日 晴 去年余 去年眼疾 去年退去年去并之報

十四日 晴 去年余 去年眼疾 去年退去年去并之報

花譜二十年
日

日	九日	八日	七日	六日	五日	四日	三日	二日	四日	三日	二日	一日
---	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----

上野山平橋盛一削

日	二十七日	二十六日	二十五日	二十四日	二十三日	二十二日	二十一日	二十日	十九日	十八日	十七日	十六日	十五日
---	------	------	------	------	------	------	------	-----	-----	-----	-----	-----	-----

十八日 晴 佐藤 柳川 宗也 祝三忠孝 上野山平橋盛一削

十日
 十一日
 十二日
 十三日
 十四日
 十五日 晴 可祝一人 庭下人向山 櫻苑 謝老 七 年 花 好 舞
 十六日
 十七日
 十八日
 十九日
 二十日
 二十一日 晴 園下 木 綠
 二十二日 晴 園下 木 綠
 二十三日 晴 園下 木 綠
 二十四日 晴 園下 木 綠
 二十五日 晴 園下 木 綠
 二十六日 晴 園下 木 綠
 二十七日 晴 園下 木 綠
 二十八日 晴 園下 木 綠
 二十九日 晴 園下 木 綠
 三十日 晴 園下 木 綠
 三十一日 晴 園下 木 綠

海棠 粉 櫻 苑

晚 櫻 苑 粉 櫻 苑

二十三 藤 苑 牡丹 漸 開 海棠 已 盡 變
 二十四
 二十五
 二十六
 二十七 園 中 藤 苑 盛 開 如 錦 多 花 下 舞 舞
 二十八
 二十九
 三十
 三十一

此 夕 尚 月 如 玉

月 光 照 櫻 苑

三月

廿六日

不寐

晩方舟中東に舞——

廿七日

舟中書状

午後長沙有来 港中 舟中 舟中 舟中
軍艦 艦隊 艦隊 艦隊 艦隊 艦隊
林陽 舟中 舟中 舟中 舟中 舟中
舟中 舟中 舟中 舟中 舟中 舟中

舟中

舟中 舟中 舟中 舟中 舟中 舟中

晩方 雨 舟中 舟中 舟中 舟中 舟中

海陸陸物たぐく三原を癡らとす
の影林と樹一切あり改し但し
手紙に列し是原の石中十句
手紙に用ひしもの
之と海油信りしもの
一しもの
夜すす
三原の石中十句
三原の石中十句
二十日
新米送る林ち田人のあし
風葉し
長廿二寸
削せり

テを入れ防腐し
三原の石中十句
長廿二寸
削せり

三十一日
新米送る林ち田人のあし
風葉し
長廿二寸
削せり

三十一日
新米送る林ち田人のあし
風葉し
長廿二寸
削せり

通し四合... 年輩の御

赤丸... 局中... 解... 不... 米... 一... 井... 煮... 酒... 好... 切... 玉

長... 米... 井... 煮... 酒... 好... 切... 玉

四月一日

於大同... 米... 煮... 酒... 好... 切... 玉

三平

癩切

戊子の... 三月... 長林... 癩... 米... 切... 包... 長... 切... 包... 切...

知事榮原
海軍
海軍

三十日大田村海原村に於て
新がーせと、精のゆめをよとて
解温三十七日分、海原流山長政
東山形縣知事、常務委員、長政
断り年
陽代銀を、白毛、小、大、
既先所、古、新、中、
直十時、林、木、葉、洗、池、
區、三、七、分、

四月

北日好晴、風園、櫻、花、早、咲、
東海原、市村、夫、君、不、
之、中、分、再、
波、者、忠、
、半、以、
、海、原、
有、人、
東、向、島、
、母、
吉、井、
、在、
有、島、

新皇帝は皇后の英國女王の娘あり、醜婦なりとの言
聞かざりし此皇后はピエールのアレキサンドル親王の結婚言
と不同なりを反對し、我が第二皇子と結婚せしむ
熱心者ありし先帝はピエールの若くは若くは不問を
ホルギリ王と廢る一カアレキサンドルの権威と利益を
此の子ありし、新皇帝夫婦は先帝はピエールの女
しるは結婚を熱心し、刺さる新帝は病癒
初より、皇太后は新帝は不問を白紙に
し、得て、大問題ありし、新帝はピエールの
力あり、皇后は先帝の若くは若くは不問を
君臣の間不和は前兆と見たりし、
新帝は病癒し、皇后は病癒し、
日前賜を教并玉章辱問、朕は意欲し、
久不相見、辭文は満會

欲謝無辭、僕初病自滋旬、其後北日、發癰疽、
劇痛、數日、竟傳醫者、切開し、而東朝、醫來治、
癰殆、經一月、不能出、昨又賜書、况詩係、
別衣、可重、重、則少、數、四、不、當、一、快、融、中、有、勝、杜、
子美詩、愈癰者、萬、一、壁、上、懸、雙、幅、且、吟、且、慰、
自今、遇、旬、日、可、共、全、命、道、幸、而、系、念、者、梅、以、日、疾、
瘳、梅、花、為、阻、癰、不能、賞、觀、乃、看、所、天、之、幸、
于、我、薄、也、謹、呈、寸、楮、拜、為、即、頌、
燕齋先生、台、禧、
尋、家、鴨、一、雙、又、是、晚、餐、良、聊、博、一、粲、而已、身、詩、
稍、遲、可、以、奉、知、也、
黎、公、使、有、返、朝、
多、亞、細、亞、協、約、有、紅、葉、龍、催、一、層、長、別、居、也、

自今不能の唯原長楷奉刻骨長の海部法基
七箇升抄要き一カ
勝ありて人舞鶴印老翁相と云此書名歌
三有あり五箇抄と云
夜林事象

古昔時古田は橋を造りて河心可流ありて山と云所
系の 爲園持事二人未
増税中件男祓り等一何由信信之州と古物と云

此より後伊初の経理を辭し黒田に譲るが如く
 出ると仰しよと書拜り伊初は決心し白鳥を職と勤
 むる者なるをあるまじく説く事上げし
 所より黒田は決して受けぬ事仰せしむる勅めきうも
 あらずとてし給中々をなす事あるとて仰し
 之聖書拜黒田に對して伊初は黒田を其後中身門前
 より引元十石の書状を黒田に付ししとて此後亦
 於貴公に任也大臣接但し中々を與はらず貴公
 一衣の書書を之日も不可無但し時機到り來せし書
 む人の親をられたまはれし中臣意あるはし中略し
 其夜は又伊初黒田に對し其の書書中々は其
 成書しし黒田に之書書と書伊初は亦し給
 却の事も感じ給へし伊初は物々しうと書書給へし

里留も書拜の意をいふとあり伊初は知らば其意
 黑田に之書書と書拜の事候と承りし事
 伊初は其意を承り給へし事―十日の書書しし事
 公を之を伊初黒田に對し其の書書しし事
 決りし事候と承りし事―其の事承りし事
 弱りし事候と承りし事―其の事承りし事
 謙るな物と書拜り又伊初は黒田に對し其の書書しし事
 書山縣山向古山等ある事承りし事―其の事承りし事
 其の事承りし事―其の事承りし事
 ありし事承りし事―其の事承りし事
 める事承りし事―其の事承りし事
 承りし事承りし事―其の事承りし事
 新に黒田院を承りし事承りし事承りし事承りし事

此者一世
の獨り
帝の故
セリ公皇

獨り二世皇帝
即位後同盟
諸帝國の邊
ヲ始シ露帝
ヲ向テ露帝
歡心博
ス

二十一年八月二十日帝山橋ヲ葉記他日
考テ供テ 時多勢弱ト後方ニバルカリヤ國王更迭ノ儀

去レ七月十九日露帝都彼得堡ノ皇ト獨シ皇帝ウイムルム
二世と露國の皇帝アレキサンデル三世の會合ニ來歐洲ノ政
治家兩國ノ政略ヲ注目シ種々の臆測ヲ為シ者アレシト獨
帝、即位後日ならずシ同盟國の諸帝王及以姻
戚の縁者英國女皇を度外ニ直ニ最初ニ露帝ト
訪問シテ交誼ヲ修メシ一事ハ大ニ露帝ノ歡心ヲ得
ルモノアリ歐洲の政治家ノ名實ニ別題
一 獨帝ハ何故ニ露帝都ヲ起シテ
一 兩帝ハ會合シテ何事ヲ協議セリ

即波羽露
境入之露宿
力令セテ之
御前西帝
室美御邊
ス

後之問題と解くは頗る困難なるも前之問題と解くは
極めて容易なりとす抑露宿西國の近き漸く不和
を起せしむる西帝室間の素一筋一々の出足事
ありしは往年一世の精兵を懸けて歐洲諸國を
奔るや一ゆきあり露帝一世アレキサンダーと
王フリードリッヒウィルヘルム三世と連合し之を抵抗せしむ
爾來殆んが百年間西帝室間素を結び敵を設けず
事なかりしは西帝室間素を結ぶに敢て敢て
露國の帝王と互に談話せんが如き一は抑露宿西國諸
國の素を追想し一は抑露宿西國諸國の素を
追想し一は抑露宿西國諸國の素を

八八〇年
三六
三六
三六

を語ればしあらずいへど右會合より其もて世人の耳目
を驚かすべし風説起りたりたの如し
七月廿八日敦倫堂の報曰く 櫻都維也納その評
るゆれば 相露西帝會合の素東歐事件を議し 露帝
王 フレデリック公を廢し 下抹の フョルデマー公を擢立す
る事を決し 相露西帝ハ下抹キ 白此議之致せし
むる書中より其具は 露帝の風説しる事案北
直俄を判すも決らざれば 今露西帝はバルカリア王を推
立せんが評あり 露帝ハ下抹王クリスチアン九世の
弟の子とて 十八百零九年 露帝ハ存年三十歳

當りハルカリヤ國王の候補者となりし由を以て此議を
一の爲実行せしむるに及ぶハ歐洲を巡遊し而して
者ありと述著し英字新聞の見
セリニオノ獨帝ハイリヒ親王ヒスミル伯等ヲ從ヘテ當府ノ
ルズル教會赴キ公會堂テ露帝及皇后ヲ鄭重ニ饗應
ヲ受ケ露帝ト共ニクラスノエセロー村ノ觀兵式品ニ露帝ノ熟練
ヲ賞シ同夜ピノメリホフ宮殿ニ露帝ヲ招待適ヒ露國皇后
内閣諸大臣及ヒ獨乙將官モ同宴會ニシタリ
本日獨帝ニオック兵野外演習ヲ概観ノ際露帝ニ總ヲ並ヘテ
いと喜シクハ打諾リ歸途ノ後露國外務大臣キール思熟爲勲章
ノ同次官ウラゴリアハ赤就爲勲章ヲ與ヘタリ
當國ノ官吏ハ今獨帝ノ會合ハ必ス歐洲平和ノ一紀元ヲ始ルカラ

今や西帝
ミヨウス
重ニキリル
事家ノ見
ニ十年一月
日讀ム

ントノ説ヲ爲ス者アレヒ重立ニ政事家ハ左ホド大切ニ結果ヲ生
セサルベシト云ヘリ
ニテ曾本日露帝及ヒ皇后ハ獨逸帝船ホーシツラン號甲板
ニ獨帝共ニ朝飯ヲ吃シ帝ノ遠游ヲ謝シテ別意ヲ表スルト
同時ニ獨艦ハ錨ヲ拔テ一帯ノ黒烟ヲハクロシアタツトの港内ニ殘
テ瑞典ノ首都ストックホルムヘ向ケ出發セリ
ニテ音ストックホルム發ノ報ヲ瑞典王オスカル及ヒ皇太子ハ獨逸
帝ヲ迎ヒ爲メ本日午前十時甲鐵艦ドロック號ニ搭テ港ヲ出テ
午前八時頃獨逸帝船ト會合テホーシツラン號ニ乘リ移リ西
國軍艦之ヲ護テ正午頃當港着シ獨帝一行ハ真ニ上陸
ニテ王宮ニ進シ國王懇話ヲ爲シテ皆當府ノ人民ハ路傍ニ
群集シテ獨帝ノ萬歳ヲ祝セシカハ帝ハ大喜悅ハ状ヲ顯ハシ
オスカル王ト暫時的植物園ヲ逍遙セシ後王宮於國王ノ宴會ニ

一行ヲ從ヘテ高帝シレハ樂隊ハ獨逸ノ軍歌ヲ奏シ國王ハ
太白ヲ舉テ獨帝ノ萬歲ヲ祝シ西國則チ交情益々親密ナリ
欲シ意ヲ述ヘ獨帝之ニ答テ瑞典獨逸ノ親和ノ破シサルヲ保シ
巨ノ胸襟アリテ談話ヲ為セリ

二十七日早朝獨帝ハオスカル王ガスタフ親王ハインリヒ親王ビトメルク伯
等ヲ伴ヒテ市中ノ名所ヲ縦覽シ午後遊船ヲ御シテトツキシグホ
ハニ趣キタリ

三十日コッペンヘーゲン府茂ノ報曰下林獨逸兩國艦隊本早
前九時頃ボロン村ノ南方ノ相會シ下林王クリスチアン九世及
皇太子フリードリヒハ獨逸帝船ホーミンゲン親王乘リ移リ
一時濱當府ノ上陸シテ近衛兵ヲ奉迎テ得テ王宮ニ赴キ密議シ
ナシタリ獨帝ハ明朝出發直伯林ノ向テ望マシム

歐洲中原略 二一七

ヒスメリク侯ガ目下獨逸ノ強兵ヲ養ヒ置リハ其國力ニ堪ヘサルヲ
慮リ先ツ帝ヲテ露國ニ赴ムカシメ同國帝ト舊誼ヲ尋クノ折
儒ヲ東歐事任有協議ノ事ハ議多熟シテ後帝ハアルスロー
州ノ幸シ又埃伊二國ノ帝王會シテ充分他ノ困難ヲ掃ヒ置
キ專ラ佛國ノ向テ境上ノ兵備ヲ減セシムル策ヲ施シ當テ佛國
カ唯ノ諾無事ニ其請ヲ聞クハ仕合ノ至リシ也佛國モ左ノナリ
若シ其請ヲ否ムル於テハ一旦戰爭ニ可キリ戰フテ勝負ヲ決ス
後兵員ヲ減セントスル策アリト風説ナリ其後ノ最近報

佛國ノ戒心

獨逸帝ガコンスタット以テテ露帝會合セシ後ノ模様ノ餘風
説セシ所ト追テ皆合シ來ル折ニ折ラアルスロー州ニハ近日獨
逸陸軍ノ大運動アル事ニハヤツツ府ヲ重ク本營トシ既同州

内、到着せし兵隊ハ二十萬人及ハリ左ハ佛國ノ諸新聞ハ頻々
 筆ヲ論テ獨逸ノ國境近ク兵隊ヲ集ルル果シテ佛國ノ向テ兵
 ヲ鮮クベシト要求スル用意ナシト將々然ラズヤ杯記載セリ免ク申
 佛國ノ獨逸ニ對シテ神經ハ次第ニ鋭敏ニ赴クモノナリ
 巴利七月廿六日發シテ電ニ佛國ノ陸軍ノ近日大運動ヲ催ス付テ
 巴利相場會所昨日ノ諸株式中ニ變動シテ陸軍卿 フレシ子
 一氏ハ第十五軍隊ノ強弱ヲ試ルカメ日ノ期ニ出師準備ヲ為ス
 一ハ決セリ蓋シ同軍隊ノ本營ハナシシ（獨逸國境ニ近キ都府）ナリ故
 ニフレシ子一氏向者出張ヲ試驗改良ス答テ此大運動出
 師準備ノ二事或ハ別段深キ意味アリテ催スアラサルトノ説
 モアレド併シ近來獨逸ハ佛國ニ對シテ穩チテ素振ニ基キシ
 一ハハ明白ナリ

母國行
 自國を攻
 則向島
 清宮下

十月七日 日曜 三年

好む所を自ら風由り似て居る 秋夫多う
 たりて是を俄に俄にひき七千ニシテ友母
 一人と四人はこれに推し事ヲ打ちのりて
 是の川がせりて 虎子ありて 銅を重なり
 而るのしりまうとわけけり 國を攻るに
 弟死す 刑 此をこす 一人の事と仰し
 の車とありて 向島まで 依りて 上野山上
 としそ下 下りて 我を女物を して 國を
 の死を ありて 七多あり 死を して 梅 夫多のむ
 舟人 ありて 舟 夫多あり 舟 夫多あり
 舟 夫多あり 舟 夫多あり 舟 夫多あり

大書北堂十月十日... 公使... 禮部... 兵部... 刑部... 工部... 戶部... 吏部... 禮部... 兵部... 刑部... 工部... 戶部... 吏部...

把井陳政... 禮部... 兵部... 刑部... 工部... 戶部... 吏部...

三百... 禮部... 兵部... 刑部... 工部... 戶部... 吏部...

禮部... 兵部... 刑部... 工部... 戶部... 吏部...

禮部... 兵部... 刑部... 工部... 戶部... 吏部...

禮部... 兵部... 刑部... 工部... 戶部... 吏部...

禮部... 兵部... 刑部... 工部... 戶部... 吏部...

禮部... 兵部... 刑部... 工部... 戶部... 吏部...

禮部... 兵部... 刑部... 工部... 戶部... 吏部...

禮部... 兵部... 刑部... 工部... 戶部... 吏部...

存致友之教織
及行

是室之暖爐
火元用心

五、晴

午初林表出對食

出勤 勢長准出勤

お返し多熱き一、晴明上野源行一、古出見一(行)

由進香山、卷系菊祀(行)

夜抄東沿

六、晴

夜抄東沿

月形六八、書恨多、金子及、且、武、昌、行

勤、多、之、然、之、多、之、地、者、確、者、年、此、之、以、一、評、議、中

也、多、之、中、也、

出勤 初平家、最元、九州、心、世、勢、財、産、忍、可、禮、之、渡、于

七、晴

夜抄東沿

出勤 午後、初平、出、者、り、吉、井、日、軍、因、子、故、多、造、菊

人、形、多、之、家、年、多、感、多、(家、之、造、菊、尤、多、多、)且、古、州、

焼、香、場、村、大、之、見、行、了、之、為、根、津、(上、野、山、之、上、)人、飛

町、留、平、之、立、安、殿、之、他、屋、垣、者、本、夜、(集、)勤、多、母、親、

之、産、吉、井、の、心、也、多、

八、晴 午後、曇、且、小雨

夜抄東沿

出勤 午後、三、時、御、菊、(御、居、)多、於、此、以、言、借、法、來

之、心、候、七、夜、の、是、何、後、行、七、由、内、外、國、不、差、集、多、(四、時、以、)候、也、

向、之、所、之、御、臨、幸、集、之、心、候、之、候、也、(候、)之、候、也、(候、)之、候、也、

小雨、飛、之、止

九月

出勤とも芳舎主軒見玉御位

甚後略却能くは承徳者之語あり四山並く可程過りたる

曜来玉に則ち其眼鏡を求の申の目鏡を以て三折

並地解濟に則ち先づ者嘆せしは善法遊源と云

拜し片蘭宋可姑居に則ち對的戦大来一由を嘆せしは若

以御宅

十日晴 昭定少由禮子隔より一書報とす

出勤略中山家馳使し人少多十折も中山家之趣

候亦禮儀と安御し上後命成り其具切の趣

此一由より生来は地勝所も河原産地抄座

傍兼井池宿より是酒の宿て是地勝と稱す

下名池宿指平如の言木月人獲定一は後夜境

有人分しり次之皆急而の行身り為留所新巻二

如常之氣是辰良景なり

母法もあな元六園を境たり是為周なり

勝海老も親初の如とあせしり是則ち定然所

十日曇 相拙智山か木頭部の以汗治成す

明山王御誓書

誓書
誓書
誓書
誓書
誓書
誓書
誓書
誓書
誓書
誓書

誓書
誓書
誓書
誓書
誓書
誓書
誓書
誓書
誓書
誓書

誓書
誓書
誓書
誓書
誓書
誓書
誓書
誓書
誓書
誓書

誓書
誓書
誓書
誓書
誓書
誓書
誓書
誓書
誓書
誓書

誓書

森文部大臣意見於米澤

私塾學校之事 此學校、年收額五百圓の増共官立
府縣立學校同様ノ資格ヲ有スル得ル目下其計畫行届カ
ル去別、未沢教育會ニ者ツリ舊主公ヨリ一萬圓、大金
ヲ御下附設下之ニ米澤出身ノ官員下月ノ月俸ヲ寄附スル大抵成
熟ニ思ヒテ行ハレ已ニ願フニ教育會ハ瓦解スルニ思ヒ非教育
會ニ中學校ヲ合所シテ慶見島ノ高等中學校ノ如ク為セシム可
此事米澤ニ別論ニ東条ノ可

二十二年
八月

百六

八月三日

八月四日 二十七日

午前九時 拝見あり

苗山町迄と舞臺あり

十時五十分 古道具 葛粉 坊主 之舞あり

午前十時 高所 之舞あり

午前十時 切通 松子 所々 舞あり 全行 坊主 舞あり

七時 舟 舞あり

相方 申す 之 舞あり 舞臺 坊主 舞あり 舞臺あり

舞臺あり

十時 坊主 舞あり 坊主 舞あり 坊主 舞あり 坊主 舞あり

坊主 舞あり 坊主 舞あり 坊主 舞あり 坊主 舞あり

二月廿日

新山王... 汗... 身

常... 山王... 汗... 身

七... 山王... 汗... 身

七... 山王... 汗... 身

十... 山王... 汗... 身

保... 山王... 汗... 身

十... 山王... 汗... 身

聖... 山王... 汗... 身

年... 山王... 汗... 身

一北洋集

一北洋集